

様式1

令和6年度 学校評価表

<p>学校教育目標</p> <p>確かな学力を身に付け、心豊かにたくましく、ともに学ぶ児童の育成</p>	
<p>a ミッション</p> <p>小中一貫教育校開校に向けて 小中連携教育を通じた主体性・協働性を育む教育の推進</p>	<p>a ビジョン</p> <p>○ 「自ら学ぶ子」「ともに学ぶ子」を育てる学校 ○ 通ってよかった・通わせてよかったと実感できる安心・安全な学校 ○ 児童が憧れ頼れる教職員を育成する学校</p>

尾道市立久保小学校

評価計画				自己評価				学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
<p>確かな学力の育成</p> <p>「主体的対話的な学び」を促す授業づくりを進め、基礎学力の定着と思考力・判断力・表現力の育成を図る。</p>	<p>基礎学力の定着</p> <p>個に応じた指導の充実</p>	<p>○算数科を中心にほめと対話のある授業を実践する。 ・算数の見方・考え方をほめる。 ・対話の生まれる問いを設ける。 ○ICTを活用する。 ・eライブラリで個別課題に取り組みせ、自己評価する。 ○ミライシードを活用する。 ○帯タイムを活用する。 ・モジュールによる反復学習を繰り返す。</p>	<p>○学期末テストにおいて、クラスの平均点を目標値以上にする。 ○学期末テストにおいて、60%以下の児童を0にする。 ○標準学力調査（12月）において、クラスの平均点を全国平均以上にする。 ○主体性に関するアンケートで、目標値以上にする。（4段階評価の内、3以上の評価をした児童80%以上）</p>	<p>○学期末テスト 1年生：88 2年生：87 3年生：90 4年生：82 5年生：83 6年生：80 目標値以上：510</p> <p>○標準学力調査 全国平均以上</p> <p>○児童アンケート 80%</p>	<p>○学期末テスト 7月 60%以下0学年級</p> <p>○標準学力調査 全国平均以上</p> <p>○児童アンケート 80.3%</p>		100	B	<p>○学期末テストにおいて、4/6学級が目標値をクリアしていること、60%以下の児童が4/6学級であったことから、日々の算数科の授業で確実に力をつけることを意識することをはじめ、eライブラリの活用、朝のトレーニングタイムでのモジュールの実施により、算数科での基礎的な学力は一定程度身に付いているといえる。</p> <p>○学期末に校内一斉でeライブラリやってみよう週間に取り組んだところ、満点を狙って取り組んだり、たくさん問題を解き切れるように頑張ったりする児童の姿が見られた。また、事後アンケート（4年生以上対象）で、90.9%の児童が「eライブラリの取組で、自分の得意な単元や苦手な単元が自分で分かる」と回答していることから、苦手克服のためのツールとしても効果があると思われる。今後、さらに効果的な活用法を考えていきたい。</p> <p>○主体性に関するアンケートの結果を分析すると、「あきらめずいろいろな方法を考える」「相手の話や意見を最後まで聞く」項目の数値は高かった。しかし、「算数の学習に自信がある」項目の数値が1年と4年以外は80%に達していない。算数科に自信をもたせるよう、ほめどころへの的確なほめの手立てを講じること、相手に伝えたい・分かりたいと思うような対話を仕組む授業改善を一層図る必要がある。</p>				<p>○引き続き、eライブラリ・朝のトレーニングタイム・グッバイタイムに全校で取り組み、基礎学力が定着するように繰り返し行う。また、より効果的に取り組めるように、校内研修等で活用法や実践法を周知・交流していく。</p> <p>○算数の学習に自信がもてる児童を増やすために、校内研究授業を通して「ほめどころ」に対する「ほめの手立て」が、児童の自信につながるものであるか、児童の姿をよく見取って協議していく。また、日常的にしっかりとほめる（認める・肯定する）ことの徹底を再度図り、児童が安心して発言できる学級づくりを行う。算数科を中心に相手意識や目的を明確にもてる「対話」を単元を通じて仕組み、学びが広がる・深まることを意識した授業改善を図る。</p>	
	<p>豊かな心と体の育成</p> <p>生徒指導の三機能を生かした指導を充実し、自己指導能力の育成を図る。</p>	<p>○伝統文化と地域の文化を取り入れ、かかわりを大切にする教育活動の推進（生活科・総合的な学習の時間を中心に）</p> <p>○小中連携を活かした取組の推進</p>	<p>○伝統文化や地域教材・地域人材を活用した取組を実施する。 ・「まちたんけん」などの生活科を中心とした授業の実施 ・「のこしたい、伝えたい！久保のまち」などの総合的な学習の時間を中心とした授業の実施</p> <p>○あいさつ運動を中心とした小学校と中学校の連携を深める。 ・小学校発信のあいさつ運動キャンペーンに中学生も参加（学期に1回） ・中学生の企画したあいさつ運動に小学生も参加 ・児童会と生徒会での連携を密にする。</p>	<p>○児童アンケート 伝統文化・地域教材を活用した活動に対する肯定的評価の割合 ○職員アンケート 伝統分解・地域教材を取り入れた授業実施の割合 ○ふり回り記述 自己の肯定的な変容を自覚した児童の割合</p> <p>○あいさつ運動 中学生・小学生・先生や地域の方にあいさつができた児童の割合 ○ふり回り記述 あいさつの意味や価値に気付いたり、よさを感じたりしている児童</p>	<p>○児童アンケート 80%</p> <p>○職員アンケート 100%</p> <p>○ふり回り記述 50%</p>	<p>○児童アンケート 75.6%</p> <p>○職員アンケート 100%</p> <p>○ふり回り記述 38.9%</p>		93	B	<p>進んで久保のよさを見つけた児童のふり回り記述には「こみを拾ってくださるおばちゃんとか横断歩道を渡らせてくれる人にあいさつできた」（1年生） 「地域の人があいさつするとうれしくなる」（3年生） 「聯合で浄土寺のよさをみんなに伝えました」（5年生）などの記述が見られた。教師は意図的に伝統文化・地域教材を取り入れた授業を実施しようとしている。しかし、ふり回り記述を分析すると、そこで学んだ久保地域のよさを自覚的に語る児童や、記述内容に肯定的な変容が見られる児童はまだ少ない。</p> <p>あいさつのよさを感じている児童のふり回り記述には「自分からおはようと言ったら友達がおはようこたえてくれたうれしかった」（2年生） 「小中交流のレクリエーションを通して、交流したことで中学生にあいさつができた」（4年生） 「あいさつキャンペーンの取組のおかげで、勇気をもってあいさつすることができるようになった」（6年生）といった記述が見られた。児童会・生徒会を中心としたあいさつ運動に参加したり、レクリエーションを通して仲を深めたりすることが、あいさつを広げていくことにつながった。導入段階としての取組は成功した。今後、児童の行動がイベントによるものではなく本物になるように小中連携による指導の工夫を進める。</p>			<p>○継続して久保地区の地域教材・人材を活用した授業を生活科・総合的な学習の時間を中心に展開していく。その中で、ふり取りをはじめとして、「書く」活動を積極的に取り入れ、学んだことを自分なりに解釈し記述する機会を確保する。そうすることで、久保地区のよさを自信をもって語る児童を育てる。</p> <p>○今後、校区が広がる中で、久保の子にどう久保へのアイデンティティを持たせるか、関係6小中で、カリキュラムを検討していく中でそれぞれの地域でどうあるべきかを考えていきたいと思います。</p> <p>○小・中学校が同じ敷地内にあるという好条件を生かした他校にはない特色のある教育ができ、楽しみしがありません。</p> <p>「挨拶」はキャッチフレーズの「先手必勝」「倍返し」で効果が出ていると思います。</p>	
		<p>自己の体力を伸ばす子供の育成</p>	<p>○課題克服に向けたトレーニング（パワーアップトレーニング）を行う。 ・新体力テストの項目、「長座体前屈」「握力」「50m走」に絞り、その中から自分の課題が何かに気付き、選択する。 ・体育の授業開始時に、パワーアップトレーニングを行う。 ※11月、課題種目に関しての新体力テストを行い、成果を見取る。 ○基本的な生活習慣を身に付けさせる。 ・元気週間アンケートを実施する。 （4月・6月・9月・11月・1月） ・元気週間アンケートを基に生活習慣の実態を分析し、保護者へ周知するとともに、生活習慣の改善を促す呼びかけをする。 ・各学年の実態に応じた保健指導を行う。</p>	<p>○第2回目の測定において、課題種目に関して、第1回目測定の数値から以下のパーセンテージ記録が伸びた児童の割合。 ・「長座体前屈」… 7% ・「握力」… 15% ・「50m走」… 5%</p> <p>○アンケート 「就寝時間」「起床時間」「朝ご飯」の3観点×5日間の○の数（計15個） 13/15以上の児童数</p> <p>前回よりも生活実態が改善された児童（○の数が増える、もしくは最大値15個維持している児童）の割合</p>	<p>課題克服 80%</p> <p>アンケート 80%</p>	—	—		60%	C	<p>昨年度から継続して行っているパワーアップトレーニングについては、授業前に毎回行うことで、児童自ら課題を設定し、自主的かつ意欲的に活動できるようになってきた。また、大休日に開催している体育安全委員会による種目の測定に、94%の児童が参加することができた。このことから、児童のトレーニングに対する意識の高まりを感じることができたと見える。</p> <p>基本的な生活習慣を身に付けさせるために、元気週間アンケートを実施した。第1回（4月）の実施に際して、意欲喚起のための保護者へメール周知や、学級懇談会で担任からの説明を行った。また、第2回の実施に際しては、参観授業の後に、生活習慣についての講演会をミニートで行った。結果としては、「○の数が増えた児童」は、24%、「最大値15個を維持している児童」は24%だった。</p> <p>このことから、約半数の児童（もしくは家庭）は意識して取り組むことができたと言える。改善が見られなかった児童や家庭については、「基本的な生活習慣への意識」を高めるために、さらなる取組を検討していく必要がある。</p>			<p>○パワーアップトレーニング ・11月中旬に行う2回目の新体力テストの測定まで、パワーアップトレーニングを行う。 ・体育安全委員会による大休日の計画も引き続き行う。 ・パワーアップシートには、昨年度12月と今年度5月に計測した記録を載せたり、目標記録を載せたりすることで、児童の意欲向上を促す。目標記録を達成できた児童は3学期に表彰する。</p> <p>○生活習慣 ・引き続き、元気週間カードの取組を行う。9月実施に際して、学級懇談会で1学期のデータをもとに本校の取組状況を伝える。以後、元気週間アンケート開始時には、保護者へ便りを出して意識を取り組んでいたできるようにする。 ・元気週間でごんばった児童（4月と6月を比較して○が増えた児童及び最大値15個を維持した児童）を掲示で紹介する。 ・元気週間で、全ての回（計5回）で満点だった児童を「元気週間マスター」として表彰する。</p>

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
C：60≦（もう少し）<80
B：80≦（ほぼ達成）<100
D：（できていない）<60
【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。